

三枝充恵教授を偲ぶ

川崎 信定

日本印度学仏教学会の創設時、そして引き続きその後六十年間にわたり本会の充実と発展に多大の貢献をなされた三枝充恵（さいぐさみつよし）博士が平成二十二年十月十九日午前一時四十分、世田谷の関東中央病院にて甥御の昭裕医師他に看取られながら肺炎にて八十七年の御生涯を閉じられた。

三枝博士の業績については、今から五年前の平成十七（2005）年九月に完結した『三枝充恵著作集』（法蔵館刊、全八巻）の最終巻に御自身による詳細な年譜および著作目録（pp.1-78）が附されており、ほぼ完璧に知ることができるといえる。その時点で著書・訳書59点、共著を含めての編著書32点、論文521点、加えて雑誌・新聞等に掲載エッセイ他449点という、膨大な数量にのぼる。

三枝博士は、大正十二年四月静岡の医師宅に三男として誕生された。若くして海軍軍医を勤められた父君・恵作氏

と母堂亀和さま御薫陶の許に兄弟四人揃って優秀で勉学にいそしむ。第一高等学校文科乙類二学年在学中の昭和十八年十二月に第一回学徒出陣で三島の陸軍野戦重砲第九聯隊に臨時応召。その後、陸軍気象第一聯隊に転属し、内地勤務のままに終戦を迎えて無事復員。しかし、静岡の実家は戦災で焼失しており、間もなく父君も他界された。失意の中にも東京大学文学部哲学科（旧制）に進学し、宗教哲学の研究を志望して和辻哲郎・出隆・金子武蔵・池上謙三ほかの諸先生に学びながら、宮本正尊先生の「中論講読」授業皆出席を契機に、「仏教の思想を西洋哲学で学んだ方法論と術語とを用いて説明しよう」というテーマを自らに課し、特に「空」思想の深い理解を望むようになる。卒業論文は『中論の研究（約500枚）』で、初発表は「龍樹空観の一考察——中論を中心として——」（『宗教研究』131号、1952年所収）であり、同年に東京大学山上会議所で開催された本

学会の第一回学術大会で「智度論に引用された諸經典について」を発表し、以後、本学会学術大会において研究発表を毎回継続。昭和三十三年六月に高野山大学で開催された第八回学術大会では(この歳に初めて創設された)第一回日本印度學佛教學会賞が三枝博士ほか六名に授与されている。併せて比較思想研究分野に関する三枝博士の初期業績として、ムーア(Charles A. Moore)編著『東洋思想と西洋哲学——比較哲学論集——』(昭和三十一年、理想社刊)所収の東西哲学者執筆論文のうち十四篇の和訳担当と『カント全集 第十五巻 自然地理学』(岩波書店刊)があり、後者に対して、昭和四十一年度翻訳出版文化賞が授与されていることも特筆すべきであろう。

龍樹研究を羅什訳『大智度論』百巻を中心に行なった東京大学大学院満期修了後、ただちに同文学部助手(印度哲学研究室勤務)に就任された。博士とは一回り年少で同じく亥歳生まれの筆者・川崎は新米学生として、この時期に三枝博士から手取り足取りで面倒を見ていただいた御恩がある。博士は、花山信勝・結城令聞・水野弘元・辻直四郎・中村元・玉城康四郎・平川彰ほかの諸先生方の許で助手としての通常の大学研究室業務をこなされ、これに加えて、

当時は事務局が印度哲学研究室に間借りしていた宮本正尊会長の日本印度学仏教學会の事務職も兼任された。さらに当時ユネスコ基金で企画された中村元先生著『東洋人の思惟方法』の英訳事業、それにブツダジャヤンティ(仏誕二千五百年)記念行事等々、山ほどもある仕事を淡々と着実に処理される三枝助手の手腕は訝えていた。助手勤務四年目にアレクサンダー・フォン・フンボルト奨学生としてドイツのミュンヘン大学に留学され、ホフマン(Hernut Hofmann)教授の指導の許で二年という最短期間でDr. Phil. 学位を取得して帰国される。Mitsuyoshi Saigusa: *Studien zum Mahāprajñāpāramitā(-upadeśa-)śāstra*, Dissertation des Doktorgrades der Universität München in 1962, (Hokuseido Verlag, Tokyo, 1969.) まさに秀才の見本といふべき研究姿勢をお持ちであった。帰国後、國學院大学哲学科に迎えられ、速見敬二教授との協同で哲学研究指導体制の充実に努められた。その傍ら『國學院雑誌』・『心』(生成会・平凡社刊)・『東洋学術研究』(東洋哲学研究所刊)他に、ほとんど毎月のようにドイツを中心とした西欧思想界の研究状況・仏教学各論の寄稿を継続されていた。

昭和五十年春、開学当初の筑波大学に哲学・思想学系教

授として赴任され、宗教学・比較思想学の分野主任として

第一学群・人文学類において「比較思想」カリキュラムを開講された。宗教学(仏教)担当助教授として赴任した筆者・川崎およびギリシャ思想担当の辻村誠三助教授にとって直接上司であり、このトリオは三枝博士筑波大学御退任まで十二年の長期にわたって続く。研究室も隣り合わせで過ごした。草創期の筑波大学の周辺は見渡す限り松と薄の原野で、十五キロほど東北の彼方に筑波山、晴ればさらに遠く北方に日光連山が望めた。授業は鉄骨むき出しの巨大な体育芸術学群棟で行なわれ、日帰りできずに宿泊は陸上競技合宿所の養蚕棚式ベツトを利用した。週末に学園都市から帰宅のドライブ道中の三枝博士とのお話は楽しかった。言葉の使用の厳密さを求める博士は、こうした普段の会話中にも精確を期しておられた。博士の「ボク(僕)」の発声には一種独特のニュアンスが漂っていた。

「ボクは(原始仏教)」という表現は使わない。英語で、こういうのは一般的なの?」

「イダツパチャヤター(縁起・これに縁ること)は(一方)向進行)が本場で、(可逆性)はないね。大先生が言っているような(相依性)の例を(初期仏教)文献にボクは見

つけてない。」

「ボクは、最近むやみに使われる(させて頂く)という日本語が嫌い。行為そのものの責任所在が相手方に移されてしまつて、云っている当の本人はノホホンと免れてしまつている。」

このような何気ない言葉の中から、やがて見事な思索の結晶が次々と専門書となつて刊行された。

「人間がコトバを用いることの意義は、どれほど評価しても、しすぎることはない。」(『三枝充憲著作集』第三巻 p.352) 三枝論文の書き出しは、常に、用いる用語の明確な分析と定義付けから出発する。何事にもまず自分の立場を見極めて、その責任においてそれぞれの問題に対処する。思考の間口の広さ、奥行きの深さ、そして思索経路の厳密性の分析と反省が、博士の学問姿勢の根幹に常駐していた。

三枝博士の膨大な数量の御業績について、これらを三つの領域に分類することが可能であろう。

① 初期仏教思想研究

ベスト・セラーとなつた中村元先生との共著『パウツダ』(1987、小学館)が印象に深い。三枝博士は、本分野での個別専門研究として、「縁起」・「無我」・「苦」・「無常」・「無記」・「四諦」・「涅槃」・「こころ」

ほかのテーマに関して、とくにその根底にあるものと思われれるものをどのように、自分が理解し、解釈し、さらには体験するかを明示することによって初期仏教思想の持つ意義とその重さを追求することを、課題として自らに課しておられた。そのため、阿含經典『相応部』から開始して連言及のある全資料を網羅的に考察する。文献学的には勿論のこと、思想構造の分析解釈を追求する。そのためのノート蒐集作業は膨大となるが、博士自身がそれら全資料の中に埋没しても、なお一向意に介せずとする徹底ぶりである。これまであまり知られていなかった博士の一面として、記録しておきたい。

② 龍樹中心の中観思想から智慧般若波羅蜜への展開

ナーガールジュナ研究は、博士御自身（生涯の課題であり続けた）と述懐されるように、研究の中核をなしている。『中論における法』・『中観研究ノート』は大乗仏教研究者にとって必読の論文であり、「レグルス文庫」所収の『大智度論の物語』・『中論 縁起・空・中の思想』の明快な叙述は大きな魅力である。千ページを超える大部『中論偈頌總覽』（1984、第三文明社刊）は、大乗仏教思想原典研究者にとって今も片時も手放すことのできない貴重書である。

③ 西歐哲学・宗教思想と仏教思想を軸とした比較研究

（古今東西の哲学・思想を見晴るかして縦横に対比・分析すること）で知の本質を解明し、自己の生のあり方を問う学としての「比較思想」研究において、三枝博士が経歴・業績ともにまさに斯界のパイオニア・第一人者であることは言を俟たないであろう。本分野での哲学博士学位（乙文第十六号）を昭和四十六年五月に國學院大学で取得された。「比較哲学の途」（『理想』第二五五号、昭和二十九年八月、理想社刊）・『東洋思想と西洋思想——比較思想序論——』（昭和四十四年三月、春秋社刊）参照。

三枝博士は、昭和六十二年春に筑波大学から日本大学文学部哲学科に移行された。また東京大学・名古屋大学・駒沢大学・聖心女子大学・共立薬科大学・中央大学・明治大学・法政大学ほか数多く非常勤講師として出講。さらに「真理探究を第一義として学歴・年齢・職業・国籍・性別などにとらわれず、本当に勉強したいと願う人々に、広く門戸を開く」との中村元先生設立の財団法人東方研究会に付設・開校した東方学院の理念に深く賛同されて「比較思想論」の授業を担当され、中村先生御他界後には東方学院長の席を四年間にわたって継承された。

学会活動においても、本学会を始め、比較思想学会・日本宗教学会・仏教思想学会の理事・評議員の職を勤め、哲学会・日本倫理学会・日本仏教学会ほかでも活躍された。

さらに三枝博士は、指導された後輩の将来を顧慮されて御自身の編著書には年少の作業協力者名の明記などなど、細心の御配慮をなさっておられる。『三枝充憲著作集』各巻に添付された法蔵館の『月報』への寄稿文の多くからも明らかのように、三枝博士との協同作業の辛くても楽しかった思い出を、感謝の気持ちを込めて、今も熱く語る学界の中堅として現在活躍中の研究者は多い。

ここに謹んで、三枝充憲先生の御冥福を、心からお祈り申し上げます。

(二〇一一年二月九日)

併せて、今年度に御他界なさった諸先生方に対しても、本学会への多年の御尽力と、我々に対する御指導を深く感謝申し上げ、御冥福への祈念を、ここに記す身勝手をお赦し願う次第である。